

古屋敷遺跡発掘調査報告書

——松崎地区土地区画整理事業
計画に伴う遺跡範囲等確認調査——

1986

新潟市教育委員会

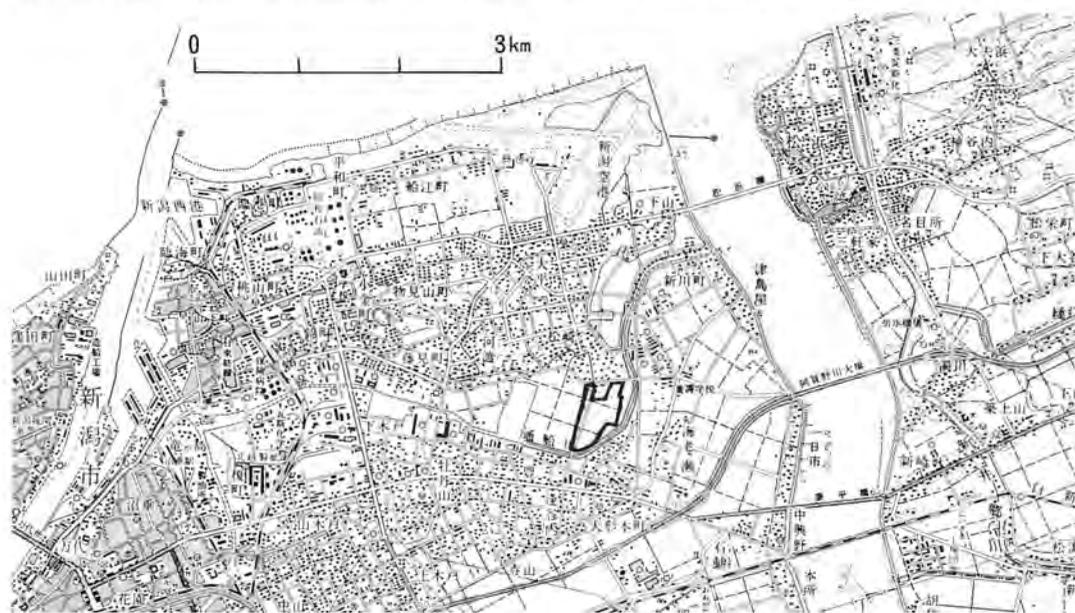
I 調査に至る経過

新潟市松崎は信濃川、阿賀野川に挟まれた最も海岸寄りの砂丘である物見山砂丘の南縁に所在する。松崎付近は市の近郊に位置し、近年急速に都市化が進み、標高30mを超えた物見山砂丘も区画整理事業などにより新興住宅街となり往時とは一変している。また松崎と通船川を隔てた村岸も工場や住宅が立ち並び、周辺の都市化現像は著しい。古屋敷遺跡の所在する一帯はこの中にあって、周囲を新興住宅地に囲まれたような状態となっている（第1図）。

当教育委員会では昭和58年12月に市都市開発課から、本地区の土地区画整理事業計画についての連絡と、開発予定地内に所在する本遺跡の取り扱いについて照会を受けた。同計画は、通船川と県営貯木場（第1図の南北に細長い長方形の水面）に区切られた約69haを関係権利者の組合施行による区画整理事業で住宅地に造成しようとするものである。当教育委員会は遺跡の取り扱いと今後の取り組みについて、県文化行政課の指導を受け、国庫、県費補助を申請して、遺跡の範囲等を確認する発掘調査を早急を実施することとした。

昭和59年9月、遺跡の現況を把握するため現地調査を実施し、本遺跡の立地する畑地28haの大半に遺物が散布し、地点不明であった梨ノ木花遺跡もこの中に含まれていることが確認された。翌昭和60年4月には確認調査に備え、調査担当者の川上貞雄氏らにより、畑地部分の分布調査を実施した。

発掘調査は国庫、県費補助を受け、昭和60年7月4日～16日にわたり実施し、発掘後小林巖雄氏による地質的な調査を補足した。調査後の整理は川上貞雄氏を中心に、佐藤友子、杉本恵子両氏が当たった。本報告のI章は事務局、II・III章は川上貞雄氏が執筆を担当した。



第1図 遺跡位置図

II 確認調査の概要

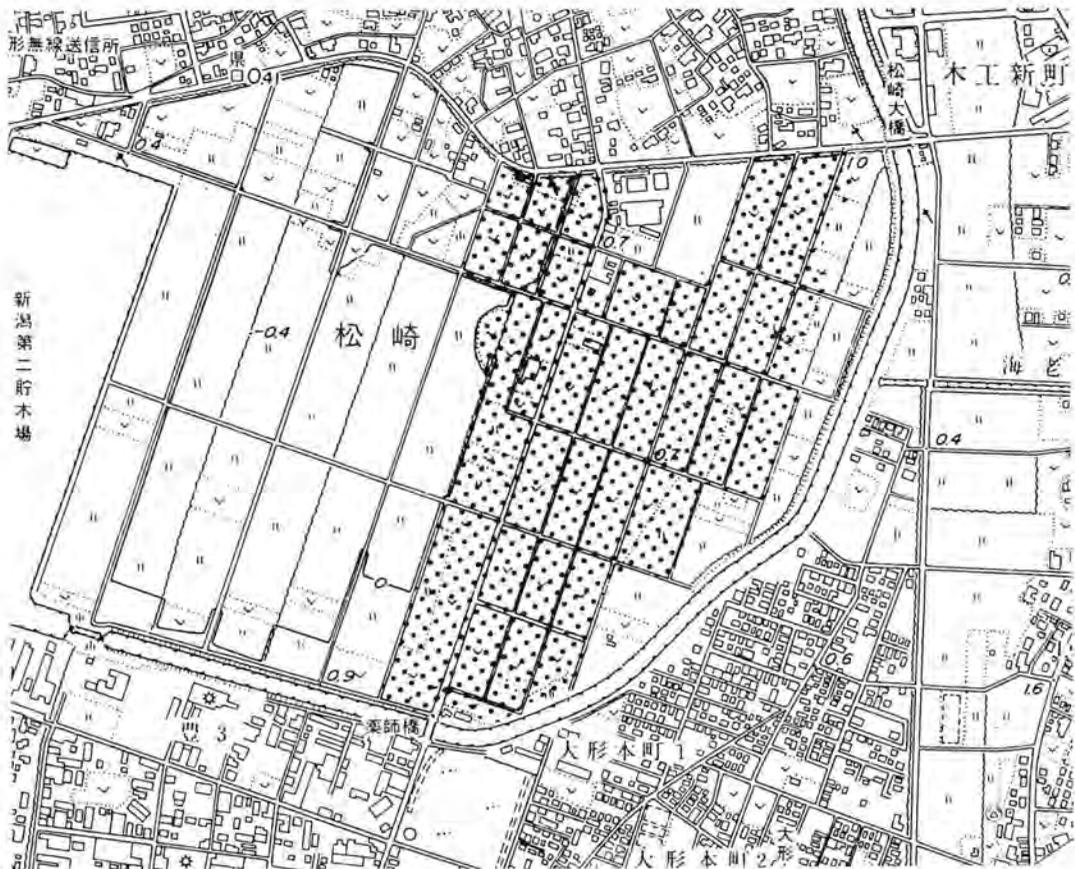
1) 調査区域

確認調査は、7月4日、当地域一帯に作付けされていた馬鈴薯の収穫が終り、次期作物の作付けまでの短期間を利用して行われることと相成った。

調査形態は新潟市教育委員会が調査主体となり、土地区画整理組合設立準備委員会及び、地権者等の協力を得、川上貞雄（日本考古学協会会員）が担当して調査を開始した。

確認調査の対象地域は松崎集落の東南に位置する低湿地帯で、東南側が現在の通船川に接する広大な農地のうち、周辺の水田部を除いた畑地内に限られた。この位置は第2図の点網で示した区域であり、その広さは南北750m、東西350mのうち、237,500㎡である。この地帯は馬鈴薯、キャベツを中心とする蔬菜生産地帯であり、その周辺は水田地帯である。これまでの分布調査では、農道及び水路等を境として40m～65mを一辺とする任意の単位を以って63区画を設けて調査を進めて来た結果、遺物の散布地域は中央以北であることがわかった。

確認調査では、一応全調査区内に任意にトレンチ、又はグリットを設けて調査することとし、



第2図 調査対象区域図(1:10,000)



第3図 試掘位置図

その位置は第3図に示した通りである。これらは図面作成の都合上やや誇張して示したが試掘溝の幅員は2m、長さは5m～20mとし総数59箇所を調査した。

確認調査の第一段階としてNo.1～50までのトレンチを調査し、その結果、遺構、遺物等が確認された地域周辺、その範囲を再確認するため9箇所のトレンチを増設し調査した。

地権者の承諾の有無、作付関係等によってトレンチの位置等はかなり制限が加えられたが、後述するごとく遺跡の範囲を把握することが出来た。

2) 調査区域内の土層序列

新潟平野を貫く大河阿賀野川は、横越村小杉地区で大きな蛇行を終えた後、日本海へ直流するが、かつては松浜地区の砂丘に遮られ西へ大きく蛇行し信濃川に合流していた。現在の通船川がほぼその河道の一部に位置するものと考えられている。調査の対象地域も大方はこの旧河道に位置するものと考えられるが、これまでの聞き取り調査の結果では調査区域のほぼ中央部が小高い丘陵状をなしていたとのことで、あるいは河渡、松崎と続く日本海砂丘の延長部分か又は張出し部分に当たるものとも考えられた。

発掘調査の結果各グリット又はトレンチにおける土層序列を第5図に柱状図として示した。これらはほとんどが水平の序列であるが、やや起伏が見られるNo.8、No.9トレンチと、東側へ大きな傾斜を有する砂層によって東西が2分されているNo.57トレンチを第4図に示した。これらは位置的に見て調査地域の東南に位置し、通船川即ち旧河道寄りである。

土質は①暗色砂質土 ②砂質粘土 ③砂 ④粘土 ⑤グライ質 ⑥シルト質 ⑦白色砂



写真1 調査対象区域全景



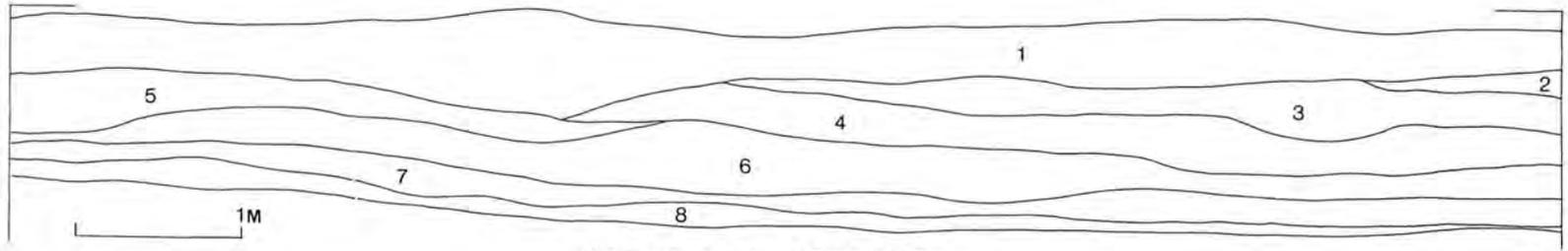
写真2 No.8トレンチ土層断面



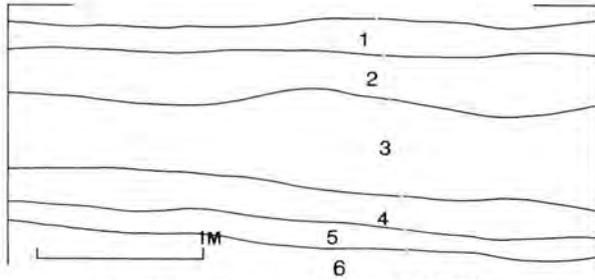
写真3 No.57トレンチ土層断面



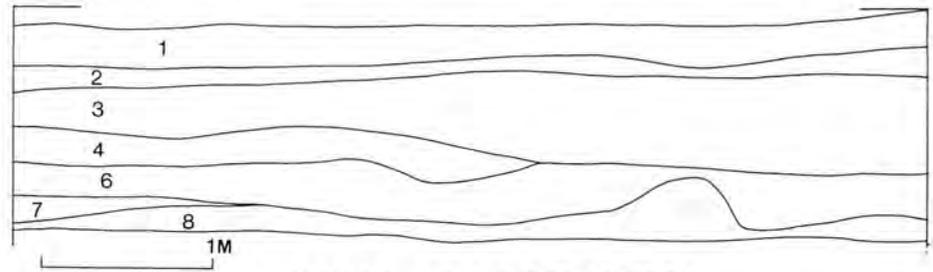
写真4 スナップ No.27トレンチ土層断面



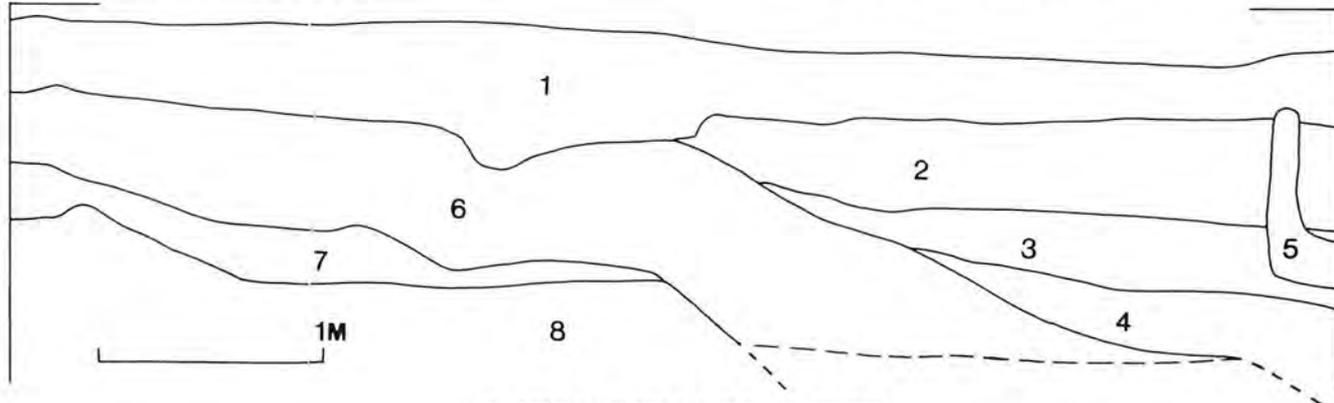
第4図の1 No.8トレンチ南側土層断面図



第4図の3 No.9トレンチ東側土層断面図

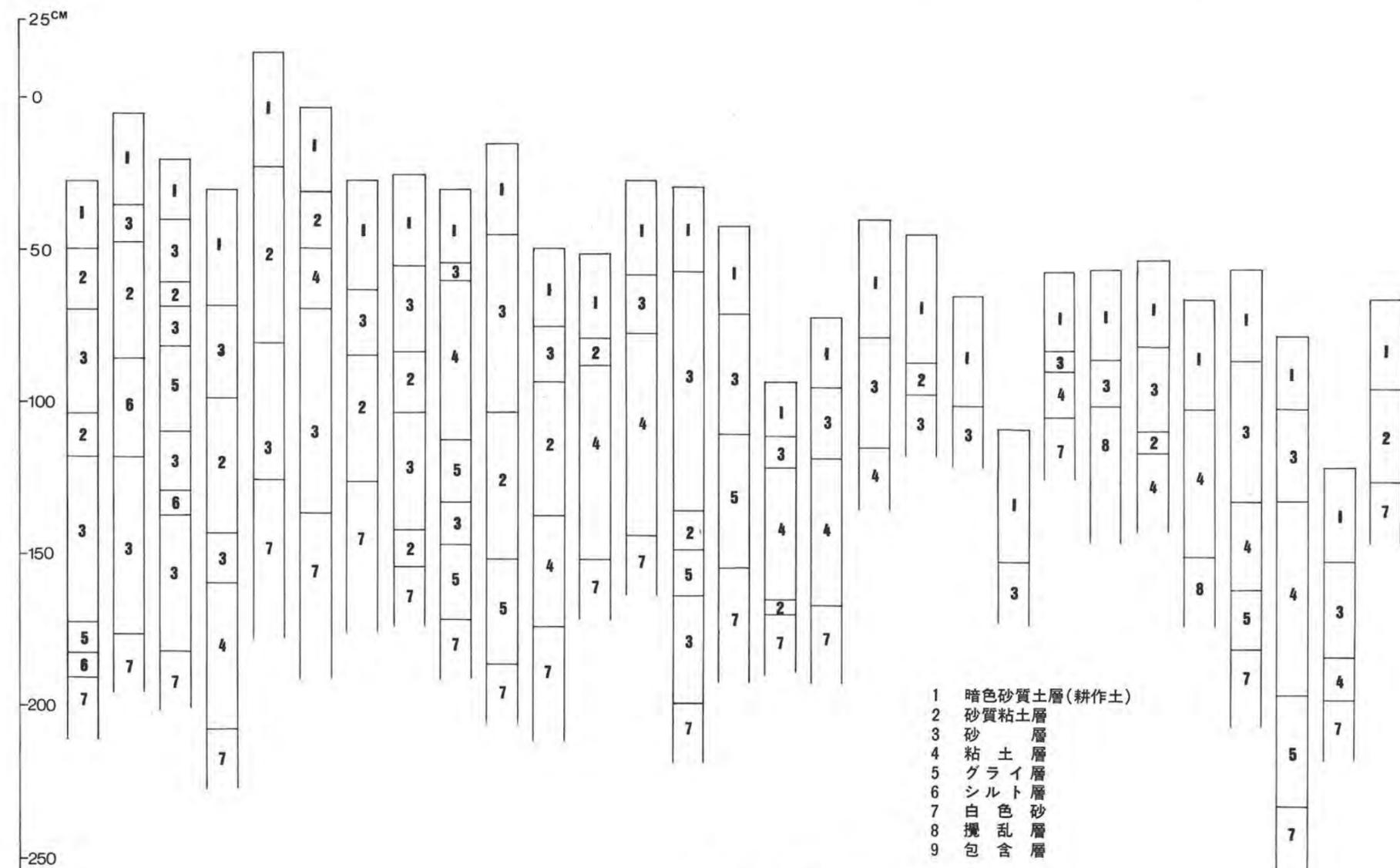


第4図の2 No.8トレンチ西側土層断面図



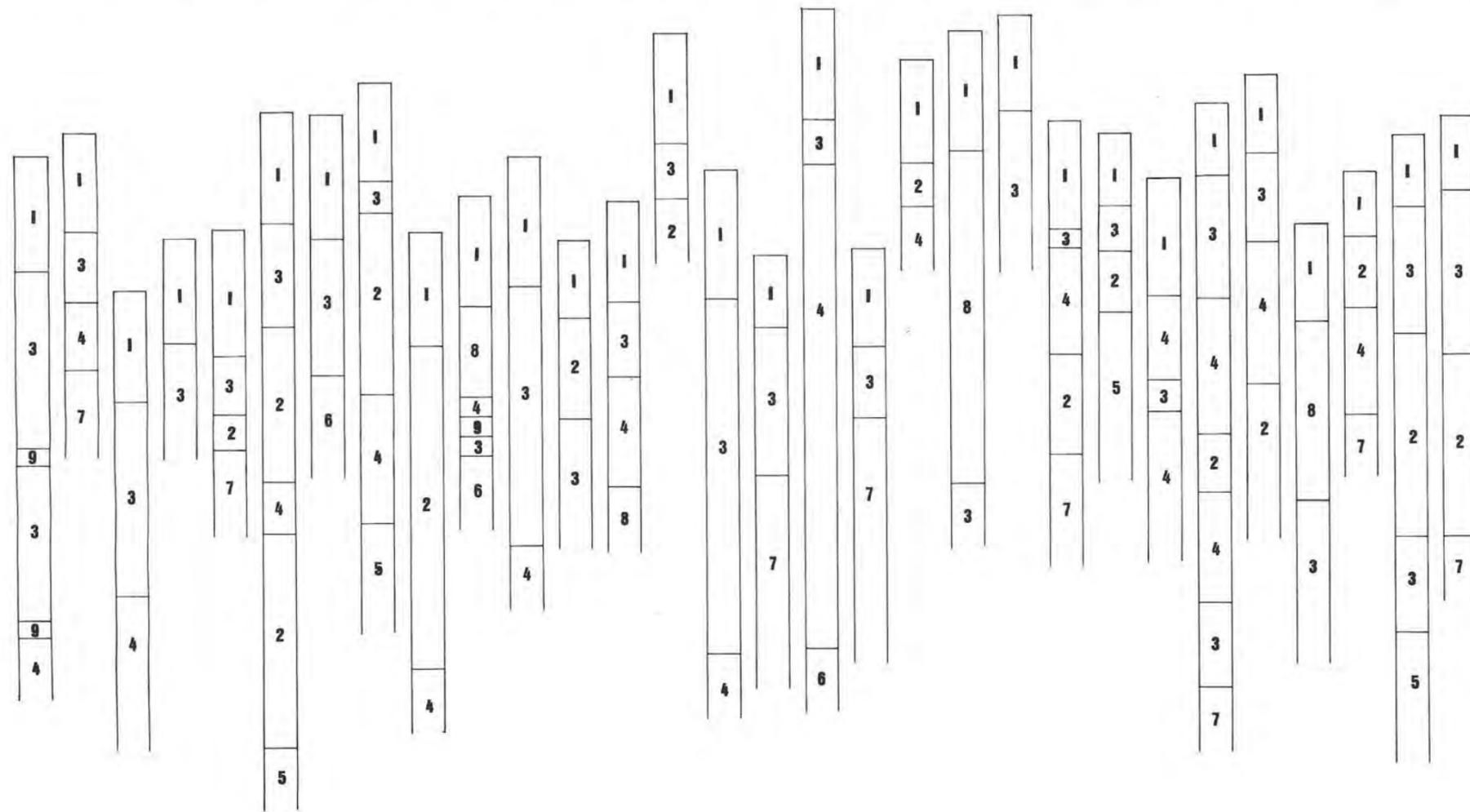
第4図の4 No.57トレンチ北側土層断面図

トレンチ No. 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29



第5図 土層柱状図

30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59



であり、さらに攪乱された混土層として⑧、包含層とした⑨は黑色砂又は黑色土である。①は③と本質的に変るものとは考えられないが、耕作土として有機物を少量混入するものである。③はここでは一率としたが、薄茶色、やや赤サビを有するもの等に分けられる。⑦の白色砂は③より粒子が細かい。

土層序列は、概ね①③④⑦で一部は④に変わって⑤又は⑥が入るのが一般的である。畑作の都合上、上層部分で掘下げを中止した区域もあることを記しておく。

3) 遺 構

調査グリット又はトレンチ内で遺構と考えられるものの検出はきわめて少ない。第6図に示したものの他2例にすぎない。

第6図の1はNo.38トレンチで、2条の溝遺構である。溝は北側が幅38cm、南側へ80cm隔てて幅50cmのものが並列する。深さは共に27cm～30cmを測った。これらの溝の間から遺物も検出された。

第6図の2はNo.43トレンチでほぼ中央に幅80cm～110cmの溝状遺構があり、遺構の一部を調査した結果、ほぼ40cm程の底部に直径5cm～8cm程の小石が充満していた。さらに北西に直径40cmの柱穴状のものを検出した。またここでは図示しなかったが、炭灰の20cm程の層及び炭と小石まじりの層が部分的に検出されている。なおトレンチ北西の落込みは何等かの遺構に結びつくものと考えられ、南東の落込みは自然のものであろう。

この他遺構と言えるものはNo.39トレンチに柱穴状の遺構、No.30トレンチに溝状遺構が検出された。又、遺構ではないがNo.37トレンチに生活面と考えられる有機物混入で固くしめつけられた層がある。

4) 遺 物

遺物の出土した発掘区はNo.22、24、30、36、37、38、39、40、43、48、52、55、56、57であり、遺物の包含状況はきわめて希薄であった。ここではこれまでの分布調査における表面採集遺物をはじめ、過去における保存遺物についても報告することにしたが、とりあえず、これらの主なものを実測し、写真図版としたのでこれに基づいて行うこととする。

過去の保存資料（古代、中世、近世） 第

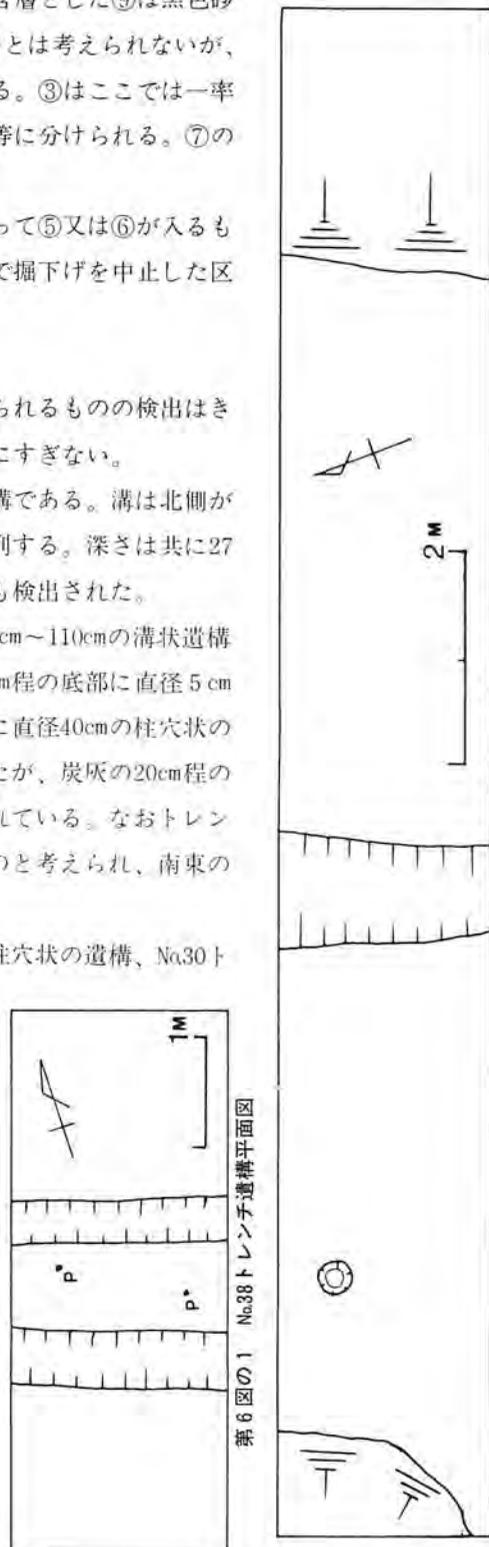




写真5 No.22トレンチ



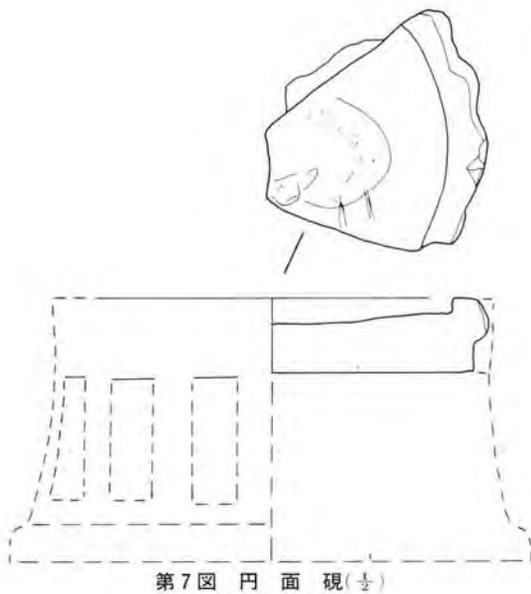
写真7 No.43トレンチ遺構



写真6 No.36トレンチ



写真8 No.38トレンチ遺構と遺物



第7図 円面硯(壺)



写真9 円面硯

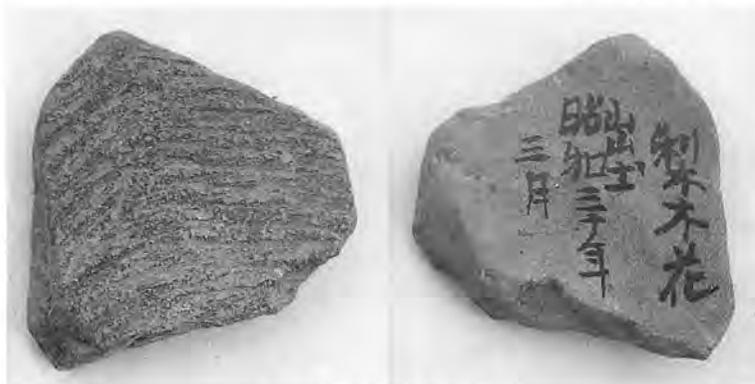


写真10 須恵器系中世陶器

7図(写真9)は須恵器の円面硯である。直径12cm程の円形のうち約6分の1強の残欠である。陸・海の区別がないもので、壺等の底部を再利用したのとも考えることも出来る。かつては墨痕が残存していたと言う。奈良時代又は平安時代の所産と考えられ、昭和30年7月、宇梨ノ木花より出土したもので、現在新潟市郷土資料館が保存しているものである。写真10は須恵器系中世陶器(珠洲焼系)の細片である。羽状の条線状タタキ目を有するが摩耗がはげしい。同じく昭和30年3月、宇梨ノ木花と注記のある出土品である。14~15世紀の所産である。写真11は、昭和27年、宇古屋敷出土、長柄銚子と注記してある。在地の近世陶器と考えられるもので小形の土瓶、即ち注口を有する陶器である。

その他写真20に示した古銭の出土物がある。寛永通宝11枚でNo.35トレンチ南側の畑地内で近年一括出土したものである。出土地点の明瞭な保存遺物である。

中世陶器 中世の遺物は数種類に分類することが出来る。写真12の1~3は瓷器系中世陶器と呼ぶものである。このうち1は笹神古窯の所産、2、3は越前系のものであろう。いずれも細片で器形等を窺うことは出来ないが

壺又は甕類である。4~6はいずれも播鉢片で、1は須恵器系(珠洲系)であり、2、3は瓷器系で越前古窯の所産であろう。

写真13の4片は一応瀬戸系と考えられるものであるが、4はあるいは舶載陶器の可能性もあり今後の課題としたい。1は

黒色釉、その他は鉄釉のもので壺類の口縁部である。

中世舶載磁器 写真14に示した青白磁類である。1、2は皿で前者には画花文が見られる。3は白磁の小壺の底部片、4は同じく白磁碗の底部である。

近世陶磁器 写真15（第8図）、写真16は伊万里染付である。写真15-1は壺蓋である。3は伊万里青磁染付碗で高台付根に単輪を画き、4の皿と共に露胎の畳付である。2は碗である。写真16はいずれも細片であるが一般的に見られる文様の碗類である。

写真17は唐津系陶器で主に平鉢類であろう。

4（第9図の1）は刷毛目文の大平鉢で、推定口径は35cm程である。

第9図の2、3は越前系大平鉢で、3は無釉である。

写真18の1（第9図の4）は口径9cmのかわらけで燈明皿である。内外面共にススの付着が見られる。

写真18の2（第9図の5）は瓦器で特に丸縁の口縁部から外面が黒色を呈する。細片のため器形等は推測出来ないが、火器類と考えられる。

その他の遺物 図示しないが土製オハジキ3点、器形不明の鉄器及び鉄片7点の他、写真19に示した竹箸1点、木炭4点がある。



写真11 近世陶器

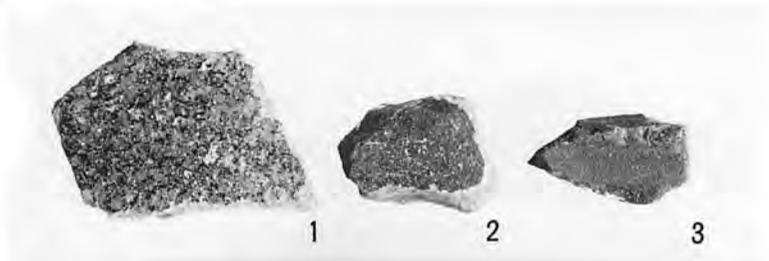
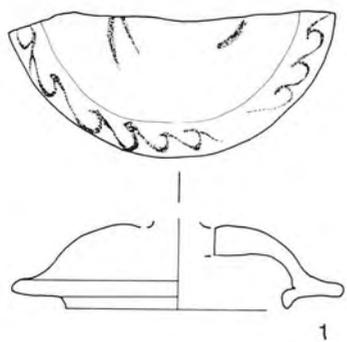


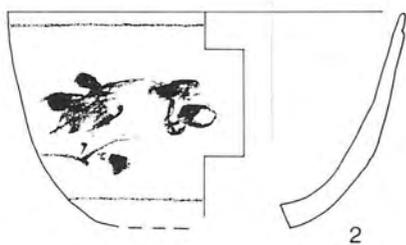
写真12 中世陶器



写真13 瀬戸系陶器



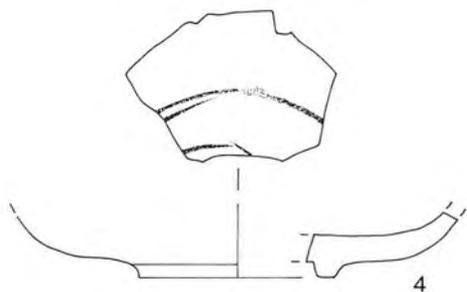
1



2



3



4

第8図 染 付(伊万里)

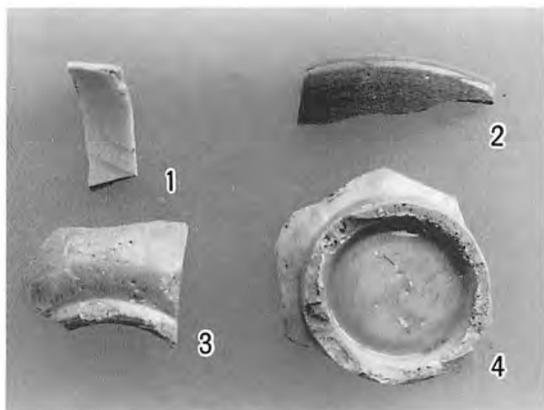


写真14 青 白 磁

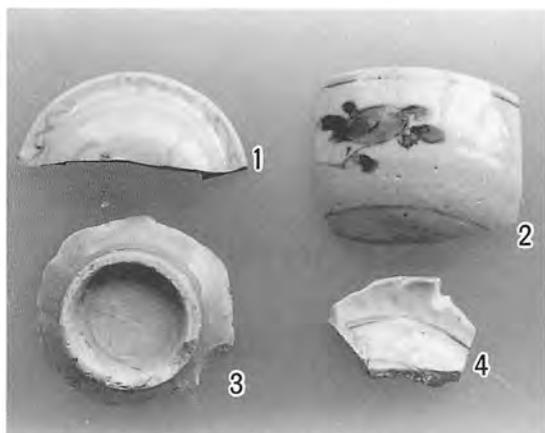


写真15 染 付(伊万里)

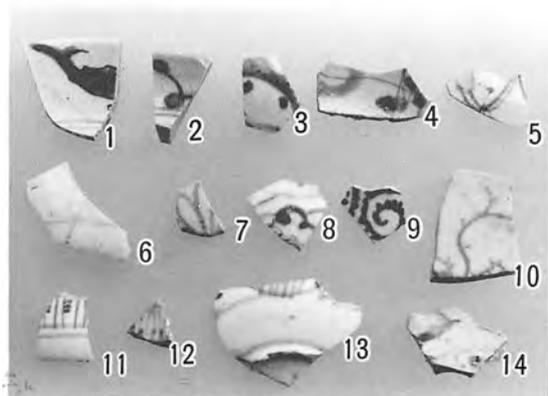


写真16 染 付(伊万里)

III ま と め

新潟市松崎地区土地区画整理事業計画にもなう遺跡範囲等の確認調査を市教育委員会から依頼され、昭和60年4月3日の分布調査に始まる一連の調査を行いここにその結果を記しておくものである。

昭和54年度発刊の新潟県遺跡地図における松崎、河渡地区の遺跡は、札木山、古屋敷の他位置不明として梨ノ木花、宮浦、溜池がある。当調査範囲内にはこのうち古屋敷、梨ノ木花の両遺跡が含まれている。

調査範囲内の自然環境は、なおも地学的見解を待たねばならないが、私達のいわゆる素人見解では、日本海の旧砂丘の末部に旧阿賀野川の吐上げた堆積土があり、その上に新砂丘の形成を見たと考えられる。そして遺跡は旧河道の堆積土上に営まれたものである。後述するように遺物は古代、中世、近世にわたっており遺跡の営みは数百年間にわたるが、保存資料である古代の遺物の出土地層を知り得ることは出来ない。ここで調査出来得た中世及び近世の遺物とも同一地層の出土であった。古代遺物も又、周辺の地層から考えて同一層の出土と考えざるを得ないところである。

グリット方式による範囲確認調査はやや希薄ではあったが、南半及び東側にはまったく遺跡と言える要素はなく、調査範囲の約22%に当たる約52,000㎡範囲が遺跡と推定される。なお各時代における遺跡の性格等については本調査を待つ以外にはない。

当遺跡における採集遺物はきわめて希薄である。前項で報告したものも含めてその総数はわずかに140点にすぎない。

過去の保存資料であった円面硯は、越後ではきわめてその出土例が少なく、曾根遺跡(豊

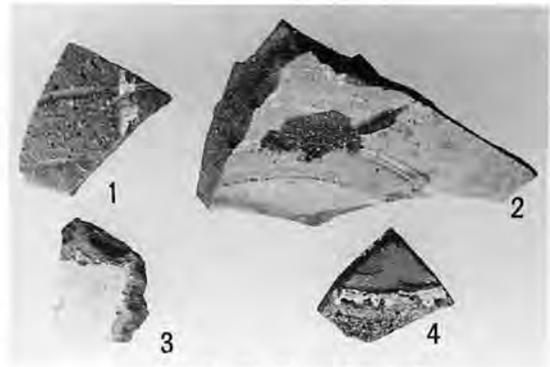
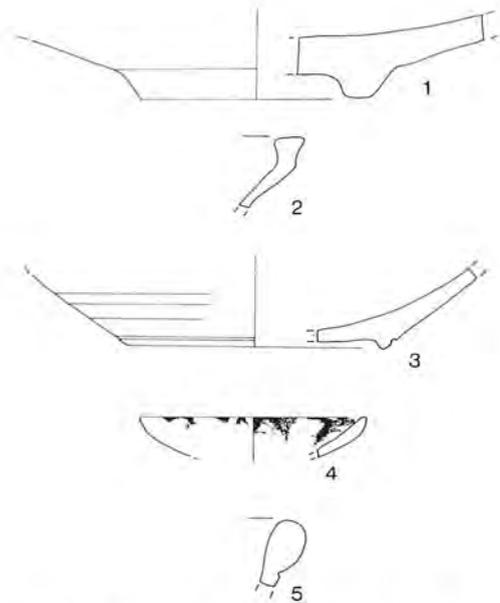


写真17 平鉢類(唐津系)



第9図 平鉢(越前系)、カワラケ、瓦器



写真18 カワラケ、瓦器



写真19 竹筭



写真20 寛永通宝

浦町)等数例が知られているに過ぎない。かつて円面硯は一般的に奈良時代のものと言う見解があったが、ここでは11～12世紀迄の幅を見る必要があると考える。いずれにせよ円面硯の出土は当遺跡の特異性を窺うことが出来る。

中世陶器は、珠洲系(須恵器系)、越前系、笹神古窯(共に瓷器系)を始め古瀬戸の出土を見、さらに舶載磁器の青白磁がある。これらはいずれも細片であり確たる編年の手がかりは得られないが、在地の笹神古窯の所産は14世紀中葉から後半のものであり、珠洲系は同Ⅳ期、越前系も同編年のⅣ～Ⅴ期に相当し、ともに16世紀のものであろう。古瀬戸の編年は今後の課題としたいが、舶載の青白磁は14～15世紀の所産と考えられる。

近世陶磁器の伊万里染付類をはじめ、唐津系、越前系の陶片等おおむね17世紀、18世紀の所産である。遺跡の存続も又これらと同様長期にわたって営まれたものであろう。

当調査に当り御援助、御協力下された土地所有者をはじめ地元役員の方々、県立新潟北高校、その他多くの方々に謝意をのべるものである。(昭和60年11月29日)

調 査 体 制

調査主体 新潟市教育委員会 教育長寺崎哲夫 同事務局次長寺島辰治

調査担当 川上貞雄(日本考古学協会会員)

調査員 小林巖雄(新潟大学理学部助教授) 酒井和男(新潟県文化財保護指導員) 佐藤友子 杉本恵子
羽仁生寛典(新潟北高校教諭)

参加者 新潟北高校社会科研究部部員10名

事務 鈴木忠(新潟市教育委員会社会教育課長) 細川仁(同課長補佐) 斎藤寿一郎(同課芸術文化係長)
古井弘(同芸術文化係) 藤塚明(同)

調査協力 網干嘉一郎(新潟県民俗学会会員) 小川修平 川崎久 小林泉 山田繁男 若槻仁一 若槻義雄
渡辺輝彦(株)今井いりやまと 新潟県立新潟北高校 新潟市郷土資料館 松崎自治会 松崎出荷組合
松崎土地区画整理組合設立準備委員会 松崎農家組合(山田製作所)

古屋敷遺跡発掘調査報告書

—松崎地区土地区画整理事業
計画に伴う遺跡範囲等確認調査—

発行日 昭和61年2月28日

発行 新潟市教育委員会

印刷 太陽印刷所
新潟市白山浦一丁目613番地
〒951 ☎ 0252-65-3101番代